

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	J. リヴィエールの「ボードレール」
Author(s)	横山, 昭正
Citation	フランス文学 , 14 : 1 - 7
Issue Date	1982-05-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040930
Right	
Relation	



J.リヴィエールの「ボードレール」

横 山 昭 正

I

リヴィエール Jacques Rivière (1886-1925, directeur de la N.R.F. de 1919 à 1925) の《Baudelaire¹⁾》は15ページほどの小論にすぎないが、熱い共感とするどい洞察に貫かれた好エッセーで、現代のボードレール研究の先取りをなし得ている点も少なくないと思われる。

ここでの私たちは、いわゆるnouvelle critiqueの主導的存在と目されているプーレ Georges Poulet (1902-) と、卓絶した詩人であると同時に精緻きまわりない詩論家としても知られるボンヌフワ Yves Bonnefoy (1923-) のボードレール論にみられる、リヴィエールのそれとの類似ないし共通点を指摘することに努めたい。この比較を進めるなかでボードレール詩の特質の一端が浮かび上がり、さらには現代の詩の問題とボードレールとのつながりをかいまみる事ができれば、この小文の目的は果されたことになる。

ところが、プーレやボンヌフワも含めて、現代のボードレール研究者はほとんど全くリヴィエールのエッセーを先駆的業績として挙げていない²⁾。これは彼のボードレール研究に止まらないのであって、プーレやリシャール Jean-Pierre Richard (1920-) の著作、とくに現代批評を論じたものをも(たとえばリシャールの『文学と感覚』に寄せられたプーレの「序文³⁾」)、バシュラール、ブランショは別格として、ベガンやレイモンの業績がとりあげられることはあっても、リヴィエールの名は意外に看過されている。エマニュエル Pierre Emmanuel (1916-) ですら、『神の前に立つ作家』Les écrivains devant Dieuシリーズの一冊《Baudelaire⁴⁾》の第一章で、先人の研究のあとをたんねんに辿っているが、やはりリヴィエールにはふれていない。理解に苦しむことといわねばならない。

まず、詩篇そのものの動きに関する指摘の重要性である。

Chaque poème de Baudelaire est un mouvement; il ne piétine pas, il n'est pas une description immobile,.....⁵⁾

このテーゼは、のちにプーレが、ことに『円環の変貌』のなかの《Baudelaire⁶⁾》において、またリシャールがその「ボードレールの深さ⁷⁾」のはしばしで扱うことになる問題で

ある。

そしてこのボードレール詩のイメージを、リヴィエールは次のように考える。

Elles [=images] sont la forme même de l'élocution, elles suivent le mouvement de la phrase, elles sont prises dans sa courbe...⁸⁾

すなわち、リヴィエールがボードレールの詩の「動き」について述べる時、この動きは、自然発生的で際限のない、自己増殖的なものではない。

Jamais chez Baudelaire les images ne foisonnent sur place ainsi que chez les inspirés.⁹⁾

一言でいえば、彼の詩は「制御された(=舵をとられた)詩」poésie gouvernée¹⁰⁾に他ならない。従ってボードレールの詩が描く運動は、たとえば次のように捉えられるのである。

Mais chaque pièce est le détour pur d'un courant, la fidélité de l'eau entre des rives tournantes.¹¹⁾

つまり彼の詩は、ことば以外の、ことばの外からやってくる、ことばの外をとりまく現実の動きに依拠していない。詩篇を構成する語自体が、動きを生み出すと同時にその動きを自ら制御しているというわけである。(ことばのもつ二重の運動と、それに支えられる詩の自立——これが、後にプーレの精妙な分析の対象となるだろう。) 語句そのものが「流れ」(岸辺と水)を体現しているのだ。ボードレールの詩は岸辺の屈曲であると同時にその屈曲に沿って流れる忠実な水の動きをも示している。さらにこれは、水という、詩人の連続する直線的な意志、あるいはテーマないし思想をになう事物が、流れながら、同時にその流れる場の抵抗をうけて曲りくねる、そして岸辺の屈曲した線をうみ出す——またその屈曲している河床・岸辺の拘束を、水が逆に受けつつ流れる、とよみとれよう。これに類似した分析を、プーレの『円環の変貌』にみてみよう。

[...] à la dilatation des êtres s'ajoute la dilatation de l'étendue où se gonflent ces êtres...¹²⁾

あるいは、

C'est [Ce=l'essor des images] un flot, mais un flot qui s'épand, qui non seulement parcourt les lieux, mais les occupe, une énergie qui en se dilatant produit le milieu même, aqueux ou atmosphérique, ou se poursuit son élan vibratoire.¹³⁾

あるいは、

Nager, voler, rouler, voguer, tous ces termes baudelairiens, [...] expriment un mouvement continu qui, à la fois, franchit et épouse la durée.¹⁴⁾

ただリヴィエールは、このように「ボードレール」(『円環の変貌』所収)のなかでプーレが描いてみせる震動、飛躍、膨張(拡散)の側面を見逃しているかにみえる。この段階でいえば、動きがボードレールの詩の本質をなすという指摘のみがプーレと同様であり、その動きの特質となると捉え方が異なってくるように思われる。だが、果してそういえるだろうか？

プーレは、ボードレールの詩の運動の三つの型を示すことで、その想像力の全体像を捉え直そうとしたのに対して、リヴィエールはその本質と思われる面だけを集中的に提出したのである。プーレの場合、結論は、上昇と下降、集中と拡散の統合的形態としての直線と曲線との結合という運動が、ボードレールの詩的理想であったとしている。

Une ligne droite autour de laquelle s'enroule une ligne sinu-
euse, telle est donc la forme, voire même la formule, de l'ac-
tivité poétique, de la possession de l'espace, du bonheur, du
poème.¹⁵⁾

L'acte poétique est donc une spirale qui s'enroule et se
déroule autour d'une pensée dirigée.¹⁶⁾

このように幾何学的思考をつらぬき、線や円の概念をあてはめた思索は展開していないが、リヴィエールの指摘するボードレール詩の二重の動きに、プーレのこの見方は呼応しているように思われる。

II

リヴィエールはこのエッセーの第二部において、上に述べた詩人の語句への拘束の要請が何に根ざしているかを語り、その内面の告白（記憶と悔恨、楽園の思い出と憂愁、完全なものへのあくなき憧憬と不完全なもの（地上的なもの、ことに人間存在そのもの）への愛——そしてその間でゆれうごく魂の苦悩）が、ボードレールの詩句にいかにか巧妙にこめられているかを語る。そして、この不完全なもの、現世的なものとしての人間存在への詩人の愛着の強さを浮彫りにしてみせる。

ところでボードレールは、プーレも指摘しているように、歩行する人間、ことに女体の移動を好んで描くが、この人間の肉体こそ、動きを体現するものであると共に現世的なものの典型であるといえよう。絶えざる運動としての肉体、だからこその肉体は時間的なものの謂いであり、滅びに向かっているこの肉体の存在ほど現世的なものはない。ボードレールが腐肉を、また女性の屍体を異様な喜悦の眼差しで凝視するのも、この故になのだ。

リヴィエールは、『悪の花』Les Fleurs du Malから「殉教の女」Une Martyreを引いて、次のように述べている。

A tout ce qui est, à tout ce qui, privé de perfection, vit pourtant, le poète étend son admiration muette et triste. Il épouse toute misère, il est prêt à recevoir tout sentiment.¹⁷

この点にボンヌフワも注目して、詩の希望、新しい始まりの予感をそこに見出している。少し長くなるが《L'Improbable》から引用してみよう。（下線部は原書でイタリック）

[...] quel est le sens de l'étrange joie qui s'éveille souvent chez Baudelaire, au plus près de l'objet mortel? Dans Un voyage a Cythère, dans La Charogne ou Une Martyre, il est sûr qu'à propos des choses les plus horribles, des plus cruels manquements de l'être dans l'existence, ce poète fait montre d'une ardente joie sans sadisme, non exclusive de la pitié la plus grave — de l'énergie d'un commencement.¹⁸

[...] Baudelaire a pressenti au fond même de ce qui est, dans sa mort et parce qu'il meurt, qu'il peut être notre salut.¹⁹

[...] l'invention baudelairienne de tel être ou de telle chose est bien chrétienne [...] ²⁰⁾

以上の記述は、ほとんどそのまま、リヴィエールが力説する次のような箇所に照応しているのである。

Cependant quelle dilection pour la réalité défaillante, incertaine, périssable! Aussi fort que l'amour du parfait, l'amour de ce à quoi il manque. Avec la contemplation de l'immuable, la pensée du mortel, un respect infini pour toutes les choses imparfaites, une admiration sans paroles, un silence devant elles, souffrantes, mutilées, exténuées. ²¹⁾

ボンヌフワのことばで要約すれば《le pas baudelairien de l'amour des choses mortelles²²⁾》といえようか。ここでリヴィエールは上記引用文の註として「白鳥」Le Cygne の詩行を引いている。

A quiconque a perdu ce qui ne se retrouve
Jamais! jamais! a ceux qui s'abreuvent de pleurs...

ボンヌフワも「詩の行為と場所」L'acte et le lieu de la poésie. IVにおいてこの「白鳥」をとりあげ、前述の彼の主張を再び検証している。

[...] le cygne est l'existence singulière pour la première fois reconnu d'une façon souveraine dans une poésie qui mourait. Il est l'ici et le maintenant, cette limite.

[...] cet acte attendu de la poésie, et enfin accompli par le poète des Fleurs du Mal, est d'abord un acte d'amour. Baudelaire s'adresse

A quiconque a perdu ce qui ne se retrouve
Jamais! jamais!

il affirme avec lui que la seule réalité, irremplaçable, est telle chose ou tel être[...] ²³⁾

彼の別のボードレール論《Les Fleurs du Mal》のなかのことばでいえば、《Le corps, le lieu, le visage. [...] ce théâtre du corps²⁴⁾》こそ、ボードレールの詩世界に他ならない。

引用が長くなったが、リヴィエールがボードレール詩の核心に読みとったものと、ボンヌフワのそれとの共通点は明らかであろう。

ただリヴィエールが、そのカトリックとしての立場から、より宗教的・倫理的な共感を表明しているのに対して、ボンヌフワは、フランス詩、ひいては西欧文明の閉塞性とそれへの危機感のパースペクティヴのなかで、ボードレール詩に詩の新しい可能性を——詩の希望を見出そうとしている点は異なっている。

つまり、リシャールの要言に従っていえば

[...] celle [=voie] que dénoncent tous ses écrits théoriques et dont entreprend de vous détourner chacun de ses poèmes, la voie à la fois enchanteresse et maléfique du concept.²⁵⁾

に沿って築きあげられてきたと(ボンヌフワが)考えるフランス詩の流れに、ボードレールは「この肉体の劇場」 ce théâtre du corps をうちたてること、いかえるなら「存在たちを死の地平の中にたてること」 dressant les êtres dans l'horizon de la mort²⁶⁾ によって新しい地平をかいまみさせた、とボンヌフワはいうのである。

註

- 1) 《Baudelaire》, 1910, in《Etudes》, Gallimard, 1948.
- 2) Henri Peyreが上記の《Baudelaire》にふれて《l'un de ceux qui définirent le plus tôt la vraie valeur de Baudelaire, Jacques Rivière》と評価しているのが目立つくらいである。しかしPeyreは、後に註(11)でふれる箇所を除いて、リヴィエールの小論の分析を行ってはいない。 Henri Peyre,《Connaissance de Baudelaire》, José Corti, 1951, p.127.
- 3) Préface de Poulet, in《Littérature et Sensation》, Seuil, 1954.
- 4) P.Emmanuel,《Baudelaire》, Desclée De Brouwer, 1967.
- 5) J.Rivière, op.cit., p.17.
- 6) G.Poulet,《Les métamorphoses du cercle》, Plon, 1961.
- 7) J.-P.Richard,《Profondeur de Baudelaire》, in《Poésie et Profondeur》, Seuil, 1955.

- 8) J.Rivière. op.cit., p.16.
- 9) Ibid., p.16.
- 10) Ibid., p.14.
- 11) Ibid., p.14. なお H.Peyre, op.cit., p.184に, 《Jacques Rivière a loué, dans de très subtiles pages, la poésie baudelairienne d'être gouvernée comme un de ces canaux ou une de ces rivières de France》とある.
- 12) G.Poulet, op.cit., p.404.
- 13) Ibid., p.399.
- 14) Ibid., p.401.
- 15) Ibid., p.424.
- 16) Ibid., p.426.
- 17) J.Rivière, op.cit., p.25.
- 18) Y. Bonnefoy, 《L'acte et le lieu de la poésie》p.163., in 《L'Improbable》, Mercure de France, 1959.
- 19) Ibid., p.164.
- 20) Ibid., p.169.
- 21) J.Rivière, op.cit., p.24.
- 22) Y. Bonnefoy, op.cit., p.172.
- 23) Ibid., p.161.
- 24) Ibid., pp.43-44, および p.46.
- 25) J.-P. Richard, 《Onze études sur la poésie moderne》, Seuil, 1964, p.207.
- 26) Y. Bonnefoy, op.cit., p.162.

(広島女学院大学助教授)